





Red rectangular seal with illegible characters.

Red rectangular seal with illegible characters.







白く水はくも清く

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

如月の言水 雲散 水邊 好長

湯下如泉江利東川村清也

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと

○のびのびと



東門 松七  
 聖者のおよ人の持しりち松の  
 たくらたの男のあきおがを  
 龍舟の煙やばりすり出源役  
 子のあしししハハ乳ガ 仕合 志計  
 尾ハ鉄をさう喰うられしごと 池奥  
 蠟乃つ約ハ森かのの 易行  
 片りやしし悲しき年紀 可能  
 弁とせしハの系 市 落月書  
 二のあしとびくや乃乃現の系 去行  
 同列列 清書 事老内  
 ○ 東のそと 唐のそと 城下の町  
 ○ 人の声の何とまこととまれさじ  
 ○ おわしとくまをあらしきとる  
 ○ おんへあらしきとら後しき  
 ○ 姑一よ木敷入の心

捲くり牡丹と白の依りて廿  
 御が知りたまはるる松の枝まき  
 今朝の秋さく 杉ののりまき 留吟  
 白奥しは草木も母まのりてく 来名  
 白奥や同じくまこれー尾と尻 椽尾書  
 女古さよのしきや 伸 三五子  
 名所見くくあつちの 採雲  
 何れく 確く凡あくま言 飾傳  
 何れも 楳乃返同もきりり 鼓神  
 同じまきく 烟つてはしあ之味 充信  
 白頭やうまはしきくむも同と川 笑眼  
 朧敷ハハ屋下まはるるの折うり 好水  
 金すしちと松あて枝折しきく 加友  
 くらんはらくはらくはらの心 雲水



人  
あとりりまゝるる七日居るる 栗春  
林鐘  
ひしりは作らるるぬ 心  
さぬるぬぬりかろるる 彦彦  
書と書とをらるる 瑞木  
因之所清書日大奇

○ 相在中の事と云ふ事

○ 古のたのむ乃らのまれり

○ 古のたのむ乃らのまれり

○ 古のたのむ乃らのまれり

古のたのむ乃らのまれり

古のたのむ乃らのまれり

古のたのむ乃らのまれり

古のたのむ乃らのまれり

遠くくもるる人  
進後の梅をわく 軒あり  
樺乃をまじりて 虚碧  
年より 榎同は 猿松  
月をよほりて 雪谷  
柳ゆきりて 女めく 三世  
俺と云ふ入りの 帯木  
りよ交後よあて 丕伯  
取しよる 可成  
日のまじりて 定政  
人むりて 弁計  
桃木の櫛 雲袖  
雛やまじりて 万計  
朔日や 菅護  
天狗と云ふ 未及

花つら神も山あまもあまの 谷子

同々所清書同大奇

○<sup>カ</sup>俺こくたり〜<sup>フキ</sup>こまま月のあま

○<sup>カ</sup>紫あゆまはまあま守まるまりははらの声

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

隣乃ら〜のり〜<sup>子</sup>春陽

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>カ</sup>酒の勢とまままままままままままま

○<sup>+</sup> 酔いさぬ門が夢ゆり

様くよろくろはぬく夢人

夢人

江の毛揃とて物ら

赤下 濱水

くし一箇のさうのまあを解て

柳村 栗香

山寺や仏の巾をたてり

梅軒

むつしや母の好乃よき

淵真

白紙に男をたてて巾をたてり

松酒

有馬山花雪のふしを信濃女

春輝

里よりとておとすおとす

可一

あつさりとておとすおとす

虚舟

一村に今も昔も云はれし

自一

熊林の類ハ嵐の海ハ狐

如談

夕の月傾くとて人信事

栗石

眉をね、妹が森奥のふたき

旭一

巾をたて南とて一はるつ

可一

子右衛門のあつと歌をたて

女 梅

男のいさく、新に仲たつ

鹿角

林のよのけりよはるる

樂谷

らんちとてはるるはるる

林手 連中

花をたて、おとすおとす

忠貞

只、おとすおとす

高子

同々所清書言大奇

○<sup>+</sup> 京のぼりきり

○<sup>+</sup> 江戸のきりきり

○<sup>+</sup> 奥のきりきり

○<sup>+</sup> 奥のきりきり

○<sup>+</sup> 奥のきりきり

○<sup>+</sup> 奥のきりきり

○<sup>+</sup> 奥のきりきり

○<sup>+</sup> 奥のきりきり

乳母あしきくめりぬきまの根 井戸 共計  
 何れも根くまのうらむらひ 可清  
 何れも目と根くまの 水口  
 着くくまを法と住くやの 三州 柳屋  
 死ぬる目のまの法と住の 土山  
 何れも根くまの 舟雪  
 何れも根くまの 須衣  
 何れも根くまの 可清  
 何れも根くまの 信通  
 何れも根くまの 正延  
 何れも根くまの 白野  
 何れも根くまの 荒野  
 何れも根くまの 好  
 何れも根くまの 名  
 何れも根くまの 告道

木の碑地を飾りくまの 任勝

心剛 雜鬼組 虚舟

如上百四拾句大泉介 杉江

言水 江州西横国清書 壬午九月日  
五十五巻内 備官 三十五巻 奉納

○ 何れも根くまの 連中  
 ○ 何れも根くまの 可清  
 ○ 何れも根くまの 水口  
 ○ 何れも根くまの 明急  
 ○ 何れも根くまの 重治

柳花壇住し門を閉りぬ久木

日よこしとて月を望みぬ

多々々 確訣の 人望み

井垣城おとほぬく 浄人 為玄

蘇子ねむるをえとて 仙界 独信

お食の良令の 仙界 畫由

石智の少油の油とまを

さうらうしとらりし 野水

儒の徳とさひく 破戒の草茶 三子

山とまへま母とまへ 殊育山 幸流

斤年石とまへ 瓜 醉翁

鳥と海ととまへ 高 松翁

さうらうしとらりし 善門

弟へのらとれし 水 龍泉

松泉の世しとれし 松泉

山伏の徳とまへ 氏朝

白きものむらし 正信

建之の徳とまへ 西朝

信とまへし 西朝

もの徳とまへ 江蘇

徳とまへし 吟子

徳とまへし 家次

徳とまへし 水白

徳とまへし 龜角

徳とまへし 初入

徳とまへし 休

徳とまへし 貞治

徳とまへし 一首

徳とまへし

徳とまへし

徳とまへし

月をと物類はさしこみさるる  
山依り松こけり河の貝 鮎口

同河列八尾清書目

○考ゆく水とさるるの声

○城とさるる水とさるるの声

○起ゆく水とさるるの声

○面苦く水とさるるの声

○うらぐ水とさるるの声

○おのろく水とさるるの声

○氣遠のく水とさるるの声

○解ひく水とさるるの声

○くさく水とさるるの声

○鏡ひく水とさるるの声

○凡水とさるるの声

○青山とさるるの声

○如上四拾二句言水介

雲鼓江洲東川村清書 壬午二月六日

苗村大明神奉納

○ひやくく水とさるるの声

○おのろく水とさるるの声

○私ハく水とさるるの声

○あそく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

○さあく水とさるるの声

ほろろろ。強燭。多き燈の石丸

新合の店と多し備てん

半後でいふ辭くろろ一結

例と注をまよこも 大年

もつ相もむむのよりの山

花のそを礼返して如所の

も神山着くあつぬをまじ

ゆりの敷とあつぬをまじ

よろり、嫁のみとあつぬれ

ゆりかゝるる多法の経

山依の多き中うむむ

同江列弓削村清書 壬午十二月十日

○何とてそいはいゆ多福

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

○いふをばやいふをさうと

空由

馬十

木村

連中

勝水

完元

吉次

佳木

川傳

屏柳

水

月

中

一船

一瓢

瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

一瓢

糸練とくさね 去士 長章

紫合や尼が西よりのひりー 吉山 中 芦原

引けてはばをとりさるる袋 花凡

涼茶や木や三毛 茂子

りそのれ新お目の男つら 黒水

何と何しよびん掛を 吉次

利登とまりや女の丸巾

同々所青骨癸未二月十日

日野大宮奉納

○おまじりごとく 柳水

白○面やちやちやく

○まじりごとく 柳水

○まじりごとく 柳水

○まじりごとく 柳水

○まじりごとく 柳水

○まじりごとく 柳水

糸練とくさね切方山此師

紫合の舞足てきとりいさる

引けてはばをとりさるる袋

涼茶や木や三毛

りそのれ新お目の男つら

何と何しよびん掛を

利登とまりや女の丸巾

同々所青骨癸未二月十日

他

林下

如仙

及子

水蓮

白舟

松吃

女ま

一夕

野松

福子 揚水 瓢水



三条の橋ハ波のたゞ 口一奄

二條の橋多ク是尺の 杖次 正

凡コト多クは浦の早 知 未月

言物やは浦の舟の行く 玉吟

湯の御殿なる 白山

海目見く昔の 花木

はらわた山を 市松木

送りく 深泉

一年経う 深泉

同派下清春 壬午十月

○悠々の 京種

子こ人 京種

つ 九石

寄 一水

新 専人

乳母 凡

○ 京家

杖 竹丸

秋 笑種

今 谷川

踏 連中

あ 正武

○ 谷川

食 九石

天 一妻

柳 連中

全

丸石

九石

全

山の草のふさふさのまきとさあまの

藤のりーの味茶降の 紅 一采

暮し着てしるも 大人 津 元山

昨や石ころの足ゆりさぬ 威億

おまねは足もりかき 漆 重丸

菓より刺してまのの 漆 平水

○ひくくくと油とつるま 泉白

一門の座を改らひさ 封し 立木

唯む六年とて左の 敵のむし 松凡

後作のゆふなれさ大 崎白 仙菜

るのふたしらんあつと 凡のふ 泉白

場さうくひは 塩のまじり 泉白

○あまごまのをさ 同はしてあり 一木

経白くしゆき 銀し 泉白 重丸

此のふさふさの 漆の油のふ 重春

あまごまのふさふさ 大崎の 正以

あまごまのふさふさ 商人し 正木

同は下清看同月

○さひまのふさふさ

○さひまのふさふさの 漆の油のふ

○ひてはあまごまの 漆の油のふ

○石を漆の油のふ 漆の油のふ

○まらくさのふさふさ

親子の割を存人合と 漆佛 上子

さすくす 漆をたれし 中老し 里丸

あまごまのふさふさ 漆の油のふ 笑花

あまごまのふさふさ 漆の油のふ 杉凡

あまごまのふさふさ 漆の油のふ 丸石

あまごまのふさふさ 漆の油のふ 元山



死すすじら西堂の...  
所  
洗別  
被如道  
所  
子七  
笑許

同之所清音

○ 榎干うりて尺ねわしてあ  
○ 人歌の尺ねり行りてあ  
○ 三三おんおん  
○ 相と森むし八眠門書  
キ 市の端や女体男体  
ラ 燦て  
ウ 喰と  
相水

ハ 條少袖まらりか  
ハ 秋凡は  
フ 村うりて  
サ 日中  
キ 拉おの  
キ 元  
ヒ 坊  
キ 石形  
ヒ 孫  
キ 白  
ハ 此  
ワ 後

山  
木  
細  
蓄  
神  
英  
石  
関  
凡  
木  
孝  
虚  
九  
松

くろくちやうきほの宗令 桑名

如上四拾句我黒分

好春点江州長鳴清書 壬午十月

○りハひりし面白みら

○あうりあのうまきまうく

○胡くまうりも鳥よちこされ

○まらんまうこのがらんまうり

田舎うて地とそとてまらる楊 甚五

梅咲て梅とてまら茶の松仕 雲水

地野は白屋うぬ沖のゆき梅 松菊

ア新く伸有りてあうく茶坊 如杉

友をむをを念し力と梅む 加注

ア新くひまの形い糸の傾味 出水

ア新くひまの形い糸の傾味 富草

ア新くひまの形い糸の傾味 長重

ア新くひまの形い糸の傾味 西公

ア新くひまの形い糸の傾味 中組

ア新くひまの形い糸の傾味 布袋

ア新くひまの形い糸の傾味 丸寺

ア新くひまの形い糸の傾味 江徐

ア新くひまの形い糸の傾味 二八

ア新くひまの形い糸の傾味 一味

ア新くひまの形い糸の傾味 正則

ア新くひまの形い糸の傾味 木端

ア新くひまの形い糸の傾味 心計

ア新くひまの形い糸の傾味 岸柳

ア新くひまの形い糸の傾味 松泉

ア新くひまの形い糸の傾味 是記

ア新くひまの形い糸の傾味 同々所清春 壬午十月

ア新くひまの形い糸の傾味 ○まらんまうこのがらんまうり

○相しよふ日おし日うら

○いひを流形うら

○そ地をよひそ地をよひ

○いひを流形うら

起るふしおほなる名め鈴 幽松

一粒しゆしゆさぬぬの文 志水

そと折とのうらぬまゆ中 定荷

望のお付さぬく 松菊

まあるまあり奥のうら 素云

京の毛織て衣りし 葉夕

はあゝ吹みりし 十林

前して掃や掃ひし 雲水

かけし 連中

独平のふす 向南

巧し 正勝

徐景を林 土花

田 真國

人の 余心

はらりの 宗林

とめて 含木

史 柳水

法 落葉

とりの 一寸

奥の 連中

望 賀國

を 宜不

二 二里

下 直程

休 庭竹

已上四拾五句好春分







○ヨウケツク

今山の目々の味は凡神

始の味は凡神

酒の味は凡神

おの味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

徳の味は凡神

神戸

白月

松油

三凡

東水

懐山

周山

柳楊

如水

玉山

可宝

尾木

びん入の味は凡神  
大木の味は凡神  
鳥の味は凡神  
同勢勢神戸清香  
○カノウ  
○三三  
○物本は  
○何  
○先

花  
廿廿  
川

孫ありと牛うまわくく人  
旭梅  
 多ふけりよまやあくるま  
歌  
 木の松よ又迂るのいふと  
歌  
 又舟りよと八あふ  
東  
 切中一校もつれ麻の南  
夫  
 ヤ凡凡と氣骨のまほら  
正  
 ヤ珍やも自ましうひひの和  
可由  
 一ちよとの松とくろ自自の成  
楊守  
 切あつてとら内給あうれ  
川  
 凡乃鳴あしよののまもく  
舟  
 十ふとよまけんふりさ  
未  
 ヤ起るぬく猪子の味なるも  
古  
 くらそんぬい合れ  
楊  
 十舌地く柳と懐  
露  
 白髪のとてしつりまこま  
竹

けいふ能く離と 侍れ 續水  
 修りく 徳徳と云の 新松 素  
 同勢列男麻村清春 勝三百五内

○ 女のあつり此のあつり  
 有 ○ 兼さきめて果の松松  
 ○ ころくくとこらりあ坂  
 ○ ころくとあつてとれ 樹 形  
 ○ ちしほし

時のむし後(あ)りや日影くら  
江  
 初枝や幸枝(あ)ま細き切巻の火  
浦  
 至白のハねふふとく思結む  
一  
 板切切火の内ハおひんぞ  
木  
 秋上ハ秋あひぬるのま  
舟  
 月花乃る露ふと人さか丸を  
花  
 至てまよ首(あ)の岸山はれ  
月  
端



十 一枝八母の七老の極極花  
 六日やる前も思 秋の塚  
 地を穿て焼くくく 野々  
 切ら九て又高きよみわむ汁 夜雨  
 天龍や福の著面峰を及て 計木  
 乾ゆに樹をくく折れ去 見水  
 花にそげくもろぬ碑の文 花魁  
 花は凡よりちと 花魁  
 強敵くむら多勢のまわれ 一流

因之所清本 係三石百千三白

○、ハ少いふくくまのちね  
 ○、ハ國の金のまく山ゆひくく  
 ○、ハかろり地うねんい地り  
 ○、ハやうくくし現きそえらるの四  
 ○、ハ事のひきとくくすまけり

鶴の鶴よりくれぬいこや二人 草律  
 孫の白と笑度と 幸乃善 松色  
 神んくくくくくくくくく 物草  
 まの揚子と抱門や山はぬく 水月  
 什おもむくはきく根来 梳 九清  
 子の名よからの傍の若くく 上加  
 松赤とまくくくくくくくく 粟名  
 南てのいさくく毒とおひぬ 五列川  
 やそ房の傍の衣をち丹平 中女  
 白ゆらやち松しきりしき 白子  
 松し向く傍のあのの睨く 一方  
 逢枝の田針まのくくくく 一死  
 船をちや者のひよほのん 鬼湖  
 飛橋よ指くくくくくくく 迎陽  
 馬路くくくくくくくく 柳木







○凡よりうつくしき油火のうけ  
 じまの地味ゆるちん 湯 三壺田  
 是所の糖焼しう石 鼎 九一  
 中は福のしき 森取類 流  
 不海の人と違わらき 山 君言  
 毛の形より 瑞的  
 じま所焼しゆく 貝 南壺  
 谷のりお 糖の焼く 北列  
 かの形より 土山 非及  
 名月やん 水口 出良  
 味乃居らるる 素十 守心  
 けいせし 浦合 新球 行羊  
 開解 飽砕  
 水口 西界 蒼松  
 水口 蒼松

其後やはかり利とて月の形 水口 知来  
 名や校し 和及  
 不段やま 土山 方主  
 大平し 水口 流粉  
 同之所 清春 惣白 三千五百余  
 ○キ 氣乃ち 終り 時を 守り たり  
 ○ニ 似たり 根あり 水口  
 ○ト 本の 根あり 水口  
 ○カ 沖の 水口 水口  
 傾城の 水口 水口  
 化されて 水口 水口  
 後の 水口 水口



陽春の音食て天竺丸 樟扇  
穀より取りてふる湯凡そハ 白松  
ちひく強よりしき身の肥 松香  
ちりー 益友様依の 湯 流也  
く〜れ〜てまろろグ つま 白松子  
恨と八雲の囀がまろろろろ 養母子  
不孝女代持よををや茶茶 清重  
まろろよまろろろろろろろろ 白子  
有馬山まの湯煮か吸替て 龍子  
ろろろろろろろろろろろろろ 磯林  
ろろろろろろろろろろろろろ 智林  
ろろろろろろろろろろろろろ 政直  
ろろろろろろろろろろろろろ 蕉南  
ろろろろろろろろろろろろろ 白  
ろろろろろろろろろろろろろ 白  
ろろろろろろろろろろろろろ 白

同之所清書 寄白封千六百余

○ 女の旭乃りりし夕陽よ  
○ 和向やまろろろろろろろろ 油  
○ 女のまろろろろろろろろろ  
○ 茶とろろろろろろろろろろろろ  
○ 茶とろろろろろろろろろろろろ  
陽春の由よりまろろろろろろろ 樟扇  
まろろろろろろろろろろろろろ 二斯  
まろろろろろろろろろろろろろ 由文  
まろろろろろろろろろろろろろ 白文  
まろろろろろろろろろろろろろ 信次  
まろろろろろろろろろろろろろ 黒次  
まろろろろろろろろろろろろろ 北町  
まろろろろろろろろろろろろろ 西子  
まろろろろろろろろろろろろろ 虚舟

上三河の庭垣にまきり居梅丸  
帯より身経る疎を感枯柳  
懐ぬ初はとよほはまらけ  
三月や後のまゆあのをほ  
ずんく情よぬくくも  
白あまを愛あくとあつれ  
よの遊聖の義行九てぬ縁懐  
あまは蒲園を化はんの用をきて  
あま今よ嫁の気候もまきり  
蠟よあそりし子の歌申  
形まして蘇印の文庫の並と  
採りあし念仏も一所  
蘇くのんまらりりさの荷馬  
おきあのをほはまれ柳のを燈玉  
撫くはらおひひらあまらり燈玉

おきあやたよりより向例  
そり勢よあな嵐冠舟  
粟畑の穂形ようら村産如洲  
如上八拾五句綴五分  
古柳撰執列身田清春庚辰七月日  
○ちんらんゝあのみらんあがり  
○つねの公筆撰ゝあうらけり  
○三子あはれハ情ヤうらね  
○二三人あはれあはれとつゝあま  
○ヤあはれあはれあはれあはれ  
○あはれあはれあはれあはれ  
○あはれあはれあはれあはれ  
○あはれあはれあはれあはれ  
○あはれあはれあはれあはれ  
○あはれあはれあはれあはれ  
○あはれあはれあはれあはれ





